『強く生きる「道」』

山形県鶴岡市
大泉剣道スポーツ少年団
小学６年生　　佐　藤　崇　人

小学校４年生の秋、「ババ、絶対優勝するよ。」重い病気で、入院したおばあちゃんに、「明日、がんばって来いよ。」とはげまされて答えていました。「自分が一生けん命がんばっていれば、見ていてくれる人は必ずいる。だから、何事も一生けん命がんばれ。」と、試合で負けて落ちこんで帰って来たぼくを、いつも勇気づけてくれたおばあちゃんでした。次の日、初めて「優勝」を口にしてのぞんだ大会で、ぼくは全力で戦いました。そして、おばあちゃんのいる病院に急いでもどりました。でも、間に合いませんでした。ぼくは、涙でぬれたメダルをおばあちゃんの枕元におき「ありがとう」と別れを言いました。その時、かんごしさんが、「おばあちゃんは、きっと優勝するとわかっていたんだよ。」と言ってくれました。ものすごく悲しかったけれど、おばあちゃんに届いた気がして、少し気持ちがゆっくりしました。

ぼくは剣道を始めて６年目になります。初めての試合できん張した事、面や小手を打たれて痛かった事を覚えています。負けたぼくを指導者の先生方はいつも、必ず「よかった。」とほめて下さいました。ぼくの気持ちが落ちつくと、「人と同じことをしていてはいけない。人の上に立とうとする者は、必ずかげで何倍も努力しているのだから。」とおっしゃいました。

５年生の夏、同じ剣道をがんばっている友達ができました。全国大会でとなりにすわっていた千葉県代表の人です。今度一緒に稽古しようと約束し、雪のふっているぼくの住む鶴岡で、その約束を果たすことができました。「また一緒に稽古しよう。」と言って別れた２ヶ月後に大地震はやってきました。太平洋の津波と聞いて、すぐに千葉県の友達に何度も何度も電話しました。数日後にやっとぶじを知りました。うれしくて涙が止まりませんでした。

大地震のよく日、剣道の稽古がありました。団員は全員参加しました。みんなでもくとうしてから、先生はゆっくりと命の大切さをお話すると、「こんな時だからこそ、昨日までの稽古よりも、もっとたくさん気合いを入れて一生けん命に稽古するように。」と、おっしゃいました。稽古が進む中、気が付くと、今まで以上に腹の底から大きな声を出して稽古する自分がいました。被災者のために助けに行きたい。でも何もできない自分にたいする歯がゆさも感じていました。そして、団員のみんなも、震災前とはくらべものにならない大きな声を出して、新しい主将のぼくを支えてくれていました。先生のお話でふだんの稽古では思いもしなかった、ふつうに剣道をやれることの幸せを感じました。

死者１万５千人、行方不明者５千人という大さんじ。大勢の被災者。ぼく達と同じように剣道をしている人達。防具や竹刀、道場までも、全て津波がのみこんでしまった現実にいったい、自分は何が出来るのか、稽古のたびに何をしたらいいのかを考えるようになりました。結論ははっきりとはできませんが、おばあちゃんや先生方、道場や千葉の友達など、今まで自分を支えて下さった多くの方々がいるおかげで、自分がふつうに剣道を続けられていることに感謝すること。そして、今出来る事を精一杯がんばり、稽古も勉強も今日出来ることを明日にのばさないこと。

剣道を一しょに始めた兄が、被災地で働くけいさつ官の姿を見て自分もああいう立派なけいさつ官になりたいと、ボランティアに行くようになりました。ぼくも、兄が言うように、将来人のためにがんばれるしょく業につけるように、また、何事にもたえられる強い気持ちを持ち続けられる人になれるように、これからも長く剣道を続けて、いろいろな人との出会いを大切にし、毎日精一杯の努力をして生きて行こうと思います。